

花袋君を訪ふ

島崎藤村

ことしの夏はどこへも出掛けずに壁に掛けてある曆を繰って見て立秋という日を数えるさえ待ち遠しいほどの思いをした。日照り続きの乾き切った払暁ふつぎょうの空気の中で、隣家の庭の方に蝉の鳴き出したのを聞きつけたこともある。あんなに朝早く、しかもまだ薄暗いうちに蝉の鳴き声を聞いたこともめつたにない。稀な大暑の来た日には、朝もなく、また夕もなかった。長い日中と眠りがたい夜とがあつたのみだ。

しばらく花袋君をも見舞わなかった。静養中の君の様子は芝の青松寺に故有島武郎君の法事のあつた日にそこに集まつた人達からも聞き、その後東京朝日紙上に秋声君の書いたものでも読んだ。秋声君の筆は病んでいる友人の消息が伝えてあつて、あれには陰ながら感謝した。この一夏の間、秋が来たらと毎日のようにそんなことを思い暮らした。ようやく九月の八日頃に、一仕事済ました後のホツとした心持で家を出た。駒下駄に、洋傘持参で、一雨来そうな空模様の日々に代々木を訪ねて見た。この春一度花袋君を見舞いに行った頃、病後静養中の心やりらしい漢詩などが出来ていて例の達筆で半折の画用紙いっぱい書いたのが客間の壁に掛けてあり君はそれを私に読んで見せるほどの元気さで、あの頃にはまだ癌というような話はなかった。今度訪ねて行

って見て、先ずさ□思ったことは、君があの病軀で、ことしの七月から八月二十日あたりへかけての激暑によく耐えられたということだった。涼しい秋雨の来る季節を待ち暮した私達の思いに変わりはないまでも、何程それが君には深いものであつたかは知れない。

花袋君はこの春よりもいくらか面やつれがして見えたが、しかし元気はすこしも衰えていなかった。寝たり起きたりしている部屋の方から着物を改めて来て、いつもの客間に私を迎えてくれた。この節はラジウムを用いているとのことで、その化学的な治療を受けに病院通いをしていると聞く。君のように経過の良い患者もめずらしいと医師から言われたという話も出た。

旧友の来訪を受ける程うれしいことはない、と花袋君が言つて、四方山の話を始め、その客間は私に取つても馴染みの深い油絵の額の壁にかかっているとところだ。初期の長編三部作のうちの『縁』『妻』などの若々しいものをはじめ『田舎教師』『一兵卒の銃殺』、『時は過ぎ行く』と次第に深さを加えて行つた作から、衝動と情思と省察とのよく結びついた感じのする、『残雪』、その後の『恋の殿堂』、それから君が福岡日々(福岡日日新聞)のために筆を執つて慇懃に春を報じたような作で毎日私の読むことを楽しみにした。

『百夜』など―数えて来ると、幾つかの連峰を望み見るような君の労作の大部分は皆その代々木の家で書かれたものだ。談話

半ばに、冷々とした湿っぽい空気が通い過ぎるのに気が付いて、私達はかわるがわる庭にむいた硝子戸を閉めに立って行ったが、夏景はそこにも移り動いていて、めつきり秋らしくなった草木の感じも深い。かつては大樹の陰に立ち寄るようにしてそこに集まる客の多かった日のことを思うと、訪問者も遠慮がちであるかに見受けられたが、何よりも安静を肝要とする今の君に取って、病中のさみしさは会い過ぎる程の人に会うよりもまだしもまだと思われなくてもなかつた。種々な談話のふしぶしで、私は君が長い文学生涯のうちでもこの節は殊に意味深い朝夕を送って居られることを感じた。そういう私も一度重く患った経験がある。明日もあらばと思つて枕に就く晩を迎えたこともしばしばあつた。何故か私はそれほどどの病を筆にする気が起こらないし、またそれを書くところまで書けそうもない。あの時分に自分の枕もとに置いた病床日記なども殆ど成っていない。病の性質によつては、それほど消息も伝えがたい。おそらく花袋君の場合もそれだろう。ここには唯、その後の経過の良い方に向つて居られること、しかし決して無理の出来ない状態にあること、なおその健康を回復せらるるまでには相当の時日を要するであろうことを花袋君の読者に告げて置きたいと思う。私の勧めた芭蕉風呂を試みているとの話も出て、ラジウムの療法を受けた後には軽微な発熱を伴うから兎角入浴がむずかしいとも言つて居られた。君の患っているのは左

半身で、平素が熱腸の人であるだけに、朝夕の無聊ぶりょうも思いやられる、あれからは深い秋雨が来て、東京の町の空の暗い日もあつた。代々木の秋も日に日に深いものがあるだろう。どうかして静養の甲斐があつて、もう一度君が以前のような健やかなからだに返らるる日のことを祈つてこの筆を置く。

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所や補訂を加えた箇所もある。判読不能な箇所は□で表した。

※出典 当館所蔵 田山家資料新聞切抜帳より